KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Hugo Schuchardt と国際補助語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 光代 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006393

関西外国語大学 研究論集 第72号（2000年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.72 (Aug. 2000)

Hugo Schuchardt と国際補助語

小 野 光 代

0

言語学の研究領域として「社会言語学」は我が国においてもすっかり定着したといってよいだろう。翻訳も含めて出版されている社会言語学の入門書や概説書もかなりの数に上る。それらの目次を一瞥するだけでも明らかだが、社会言語学の研究対象は多様であり、かつ異質なレベルのものを含んでいる。この heterogen な対象を含むということが、初期における社会言語学に批判的な立場をとる人々に、社会言語学は科学的な言語研究を不可能にするという口実を与えた。しかし heterogen な対象を扱うというところにこそ社会言語学の本質的な性格があるといわなければならない。

現在ではピジン・クレオール語についての調査研究は社会言語学の確固とした領域になっているとはいえ、少し前まではピジンとは何かクレオールとは何かということさえ、決して自明の常識にはなってはいなかったといえよう。あるいは現在でもその傾向があることは否定できないかもしれない。特にクレオールという表現はクレオール語を指すよりもさまざまな分野で混交を意味するニュアンスで用いられているようである。ピジン語が広く偏見の対象になっていたことはそれほど昔のことではない。この“ピジン・クレオール語研究の父”と呼ばれている言語学者は Hugo Schuchardt という約一世紀半以上も前に生まれたドイツ人である。現在この領域の調査研究をリードしているのはなんといっても英語圏の研究者が多い。ピジン・クレオール語研究の先駆者がドイツ人であったということに興味を持ち、一世紀以上も前の言語学者についてもう少し調べたいということがこの小論を書く動機である。

1

1977年オーストリアのグラーツにおいてシュハルト-シンポジウム（Schuchardt-Symposium 1977 in Graz)が彼の没後50年を記念して開催された。今世紀に入ってからの言語学理論の展開

は目まぐるしいものがある。したがって学説史上に名をとどめるような、著名な言語学者であっても、死後半世紀たってその名を冠したシンポジウムが開かれることは決して通常のことではない。劇的な理論の展開の中でその研究者の業績が持つ現代的な意義が問われるからである。19世紀末からの一世紀足らずの間に言語の本質を記述するための画期的な理論がいくつか提出されたことについて M. Wandruszka は次のように述べている：

> ...100年足らずの間に三つの異なる言語学派が立て続けに、最深の確信を持って“我々はついに人間の言語に内在する法則、自律的、内在的である厳格な体系を発見した。そのことによって我々は言語の前科学的な探究、いわゆる伝統的な言語学を克服することに成功した”と宣言したことは、どこか喜劇的なおもむきが無くもない。
>
> 青年文法学派の人々は、言語学は Brugmann と Osthoff によってはじめて精緻な法則の科学になった、と述べた。構造主義者達は、科学としての言語学を最初に創設したのは De Saussure である、と確信した。ごく最近、言語学から科学が創り出された、と宣言したのはChomskyである...(注1)

この言語間言語学の(Interlinguistik)の創設者である Mario Wandruszka のどこか皮肉を込めた記述は、短い期間に起こった言語理論の展開を的確に言い表している。20世紀こそ哲学、神学、文学、文献学、民俗学等々から完全に独立した真の科学的言語学生誕の世紀なのである。ところで Schuchardt は Wandruszka の発言にでてくる三つの言語学派のどれにも属していない。言語学史上の位置づけについて Milka Ivic は Schuchardt を適切にも独立派と名付けている。(注3) 一方ドイツ語学を専攻するものが、必ずといって良いほど参照する Gerhard Helbig の近代言語学史(Geschichte der neueren Sprachwissenschaft)では Schuchardtは一言も触れられていない。Helbig の近代言語学史は－特に文法理論を中心に－という副題からも明らかなように新しく提出された文法理論を適切かつ的確に解説し、近代言語学の全容を紹介する、大項目主義事典もかねる優れた概説書である。ここで Schuchardt が扱われていないということにも Schuchardt の独自性が現れている。すなわち彼はドグマ的な学説の教祖にはならなかった。ある文法理論をたてそれを教条的に主張することは彼の最も排斥するところであった。また彼の研究の本質はフィールドワークにあった(注3) といわれているように、“ことば”は生きた人間と結びついたものであって、机上だけの言語研究は彼のよしとしないところであった。また Schuchardt の言語研究の対象は多方面に及んでいる。先に挙げたシュハルト-シンポジウムでどのような問題が議論されたかをみるとそれが明らかである。ここでは1980年にオーストリア学士院の哲学・歴史部門の議事録として刊行されたシンポジウムの論文集の目次の項目を挙げたい：

N. DENISON: Heterogenität und Kompetenz

CH. SCHWARZE: Diskussionsbeitrag zum Vortrag von N. Denison..

ST. HAFNER: H. Schuchardt und F. Miklosich.

M. HÖFLER: H. Schuchardts Beitrag zu einer Theorie der Lehnwortforschung.

C. J. HUTTERER: Konvergenz und Divergenz in der Sprachentwicklung

W. IMNAISCHWILI: H. Schuchardt und das Georgische

A. V. ISSATSCHENKO: Allgemeine Fragestellungen bei H. Schuchardt und in der heutigen Sprachwissenschaft.

D. KREMERS: H. Schuchardt als Literaturhistoriker.

R.B. LE PAGE: H. Schuchardt's Creole Studies and the Problem of Linguistic Continua.

K. LICHEM: H. Schuchardt und die Grammatik.

F. LOCHNER v. HUTTENBACH: Sachen und Wörter - Wörter und Sachen.

H. W. ÖLBERG: Die Weltsprachenfrage im wissenschaftlichen Werk H. Schuchardts

L. PAFF: Schuchardts Aufsätze in Ungarn

A. SAWOFE: H. Schuchardt: un siglo de estudios de lingüistica andaluza.

H. SCHWERTECK: H. Schuchardt und die baskischen Studien

H. J. SIMON: Ein Thema Schuchardts: Klassifikation von Sprachen; am Beispiel der Romaria

K. SORNIG: Konventionalisierung und Innovationslust

W. VIERECK: Sprachwandel

M. WANDRUSZKA: H. Schuchardt und die "Linguistik 2000" (注4)

この小論ではそれぞれの項目についての説明は省く。ただこれらの問題からは Schuchardt の時代の学界で主流となっていた言語観に鋭く対立する、きわめて進歩的な彼の言語に対する考え方を読みとることが出来ると思われる。この論文集にはシンポジウムで議論されたもののみでなく、論文として提出されたものも少数含まれている。この小論のテーマである国際補助語をあつかった Ölberg の "Weltsprachenfrage" もその一つである。このような現代的な意義を持つテーマがシンポジウムでは議論される余地がなかったことは Schuchardt の言語学者としての多面性を示すものでもある。Schuchardt 自身の著作は Leo Spitzer によって編纂され1921年に刊行された Schuchardt-Brevier によって最も簡単に読むことが出来る。Schuchardt の膨大な著作から主要な業績を手際よくまとめたコンパクトなこの書物は戦後、1976年に Wissenschaftliche Buchgesellschaft からその第二版(1928)の復刻版が出版されているからである。参考のためにこの目次の項目を引用する：

I. Lautwandel

Über die Lautgesetze.

II. Etymologie und Wörtforschung

Sachen und Wörter

Franz. mauvais > lat. malifatius

III. Sprachmischung

IV. Sprachverwandtschaft

Über die Klassifikation der romanischen Mundarten

Sprachverwandtschaft.

Das Baskische und die Sprachwissenschaft.

V. Urverwandtschaft, Ursprung.

Geschichtlich verwandt oder elementar verwandt?

VI. Sprachursprung.

I.

II.

III. Prädikat, Subjekt, Objekt.

Exkurs zu Sprachursprung III

Possessivisch und passivisch

VII. Über allgemeine Sprachwissenschaft.

VIII. Sprache und Denken

IX. Sprachgeschichte und Sprachbeschreibung

X. Sprachwissenschaft im Verhältnis zu Ethnographie, Anthropologie und Kulturgeschichte.

XI. Sprache und Nationalität.

XII. Sprachpolitik und -pädogik..

XIII. Sprachtherapie.

XIV. Über Wissenschaft im allgemeinen.

Individualismus in der Sprachforschung .

Nachtrag zu VI: Sprachliche Beziehung.(注5)

これらの項目からも Schuchardt の多彩な研究領域と現代においてアクチュアルな問題が取り上げられていることが分かるだろう。Schuchardt は24才の時に俗ラテン語(Vulgärlatein)の母音体系を膨大な資料に基づいて組織的に記述した三巻よりなる著作（第一巻488頁、 第二巻539頁、第三巻356頁） で学者としての第一歩を踏み出したロマニストであった。このことをこの二つの目次からうかがうことは少々困難である。彼の語学力は多くの言語に及んでいるか

らである。場合によってはそれらの方言さえも使いこなすことができた。もちろん“死んだ”古典語もマスターしていた。しかし Schuchardt にとって生きた人間と結びつかない言語は常によそよそしい存在でしかなかった。(注6) 生きた人間の使うことばであれば、彼によって全く平等に扱われた。言語に対するこの真の民主主義的な態度が、とくに一世紀以上も前にはどれほど希有なことであったかは、現代においてもなお方言に対する偏見が決して根絶されてはいないことこらも明らかである。社会言語学者と称する人のあからさまなピジン語蔑視の文を読んだことがある。(注7)

Ölberg は Schuchardt について次のように述べている：

> ... Schuchardt は話し手と結びつかない言語というものを考えることができなかった。彼の本来の情熱はフィールドワークにあった。イタリアで彼は馬車の御者達と彼らの居酒屋に腰を下ろした。そして庶民のあらゆる楽しみごとに参加した。毎日礼拝と劇場に通い、市民や貴族達のサロンを訪れ、生活している周囲の人々のやり方に順応しようと努めた。南スペインではゼギディリァとカスタネットをまなび、ジプシーともつきあった。... 彼には組織的なものは嫌悪の念を起こさせた。方法論とは何か。人間は自己の最良の能力を他に移すことはできない。ただ表面的に有効なものだけのそれが可能である...(注8)

ことばに対する真の民主的な考え方は、ここに描写されている Schuchardt の生きた人間とその言葉を愛する態度から生まれているといえよう。ピジン・クレオール語や人工語の問題に偏見なしに取り組むことが出来た彼の人間性をみることが出来る。

2

Helbig の近代言語学史には Schuchardt はまったく扱われていないということ、理由として彼が一派をなすような文法理論を唱導しなかった、ということは先に述べた。ここでもう一つの事情を取り上げたい。彼は一時期全く忘れ去られていたということである。Schuchardt を再発見したのはアメリカ合衆国の若い言語学者達であった。ここで Wandruszka の記述を引用する。

> ...最近ロサンゼルス・バークレーのカリフォルニア大学の若い言語学者達のグループが Schuchardt を発見した。Theo Vennemann 、Trennce H. Wilbur 、William S. Y. Wang は Schuchardt の殆ど一世紀も前の青年文法学派への“宣戦布告”を新しい視点で読んだ。そして読めば読むほど、その驚嘆の念は大きくなった。なぜなら人間のことばについて、言語

の親族関係について、言語の多様性について、言語変化について、言語混交等々についてのSchuchardtの考えは、まさしく今日のChomskyの生成変形文法によって惹き起された世界的な規模の言語学上の議論にとってきわめて現代的な意義があることを確認したからである。...

Schuchardtの考えはそれからの10年間に方向性を与えうるものである。それだけに、この天才的な反逆者(Schuchardt)が青年文法学派の教条主義を、彼の時代の硬直したシステム思考を、それを確信する相手を完膚無きまでに批判したにもかかわらず、結局は殆ど影響を持たなかったことに、彼らの驚き一層大きかった...(注9)

そしてWandruszkaは“この先駆者、探鉱者は時代を先取りして、新しい深遠で豊富なアイデアを述べているのでその全容が考察されるためには今日まで待たなければならなかった”と結論する。

青年文法学派は“音韻法則には例外はない”というテーゼをたてた。人は例外のない音韻法則を認めなければならない。その論法は、もし認めないのであれば音韻法則の存在を否定すべきだ、という二者択一を迫る強引なものであった。これはSchuchardtが絶対受け入れられないものであった。“自律的な、絶対的、自明なシステムを否定するからといって、その人間にとって全てが偶然であり、恣意的であり、カオスであるということを全く意味しない”と反論する。彼にとって言語には常に二つのものが存在する。システムと非システム、規則と例外、類似と変異などである。“Analogieとは我々が一つのものを他のものの中で再認識し、同じものを同類と見なすことを可能にする精神的な力である。Analogieは個別のものを個々に名付ける。例外を頑固に保ち、多数派に対する少数派を常に新しく創り出す能力である。”(注10)

音韻変化は青年文法学派の人々がいうように決して自然法則の強制のもとに起こるのではない。

“音韻変化はきわめてさまざまな条件の下で惹き起こされる、言語混交、散発的な音の変化と、その模倣と伝播、特に社会的に威信があると見なされる発音やアクセントなどは広く模倣されうる。きわめてさまざまな異質のファクターによる音韻変化は、いろいろなところで起こり、模倣によって波紋のように広がる。それらはお互いに阻止しあったり、干渉したりする”(注11)

以上はWandruszkaが要約した、Schuchardtが青年文法学派の音韻法則に対置させた音韻変化の姿である。

3

今まで述べてきたことから Schuchardt がピジン・クレオール語を調査研究し、人工語に肯定的な関心を寄せたことは理解できるだろう。彼は言語混交、ピジン語とクレオール語の問題と組織的に取り組んだ最初の著名な言語学者であった。この問題についての著作は1882年に始まっている。彼の生存した当時、彼は資料を世界中に及ぶ文通によって苦労して集めなければならなかった。彼によって世界中のあらゆる僻地における混交言語が調べられた。その中の最も大きな業績は、1884年の Slavo-deutsches と Slavo-italienisches である。(注12)

彼のピジン語とクレオール語の研究は混交語全体を学問的科学的な水準にまで高め、その発生と発展の問題に関して永続的な解決をもたらした。それは厖大な資料を集め分析した結果えられたもので、決して演繹的に引き出されたものではなかった。Schuchardtの言語の個々それぞれの出現形態に対する愛は、古典ラテン語と俗ラテン語、標準語と規範から逸脱する日常語を区別しない。言語に対する真の民主主義的精神に支えられたときのみ可能な研究態度である。言語の堕落ということは彼にはナンセンスであった。インドゲルマン語族の語尾変化は文献学者達が言っているように思考の形式的な型を習得するのに役立つものではなく、非合理的なものとして廃止されるべきものであった。彼は自己の学問的確信を込めて強調している。

> ...ある言語にとって生命のない事物に性が付いているのは野蛮な、非合理な時代にのみふさわしい。性記号が本来の意味を全く失ってしまっている新高ドイツ語ではそれは野蛮さの名残にしかすぎない。...(注13)

古典語を修めたこの言語学者のラジカルにも響くこの発言は注目に値するといえよう。

4

Schuchardt の業績の一つに語源研究がある。彼は語の意味をフィールドワークによる事物研究から導き出した。... むしろ人々の中へ入っていき、彼らとともに働き、彼らと活動を共にし、そのようにして事柄から語彙へ、その後の説明へとたどり着いたのであった...(注14)
この経験は Schuchardt をして言語の全ての現象形式を偏見や先入観なしに、そして記述的に根本を究めることを可能にした。この研究態度を貫くことができないもの、言語を規範的な考え方でしかとらえられないものは、Schuchardt の補助言語についての積極的な考え方も、古典文献学からロマンス語学、さらには俗ラテン語への彼の研究における対象の変化も理解することができないであろう。

国際補助語問題をを扱った最初の論文は1888年の「Auf Anlaß des Volapüks」(注15) で、ここには彼の国際補助語に対する根本的な態度がすでに述べられている。1902年7月にウィーンの帝国学士院は Schuchardt に人工的な国際補助語の作成に向けた動きに注目すること、具体的な動きが生じた場合には自ら学士院で報告することを要請した。きっかけはフランスのエスペランティストの活動であった。彼らはフランス学士院で報告し、また学士院の国際協会に請願を出させたのであった。Schuchardt はウィーン学士院の要請に直ちに応じて1903年12月10日付の報告書を作成し、学士院に提出した。これは1904年の学士院年鑑54巻に収録された。

なお Schuchardt の国際補助語についての最後の仕事は「人工的共通語の問題について」という1907年の論文である。

世界補助語の分野で刊行された論文の編纂の過程から、この時代の重要な言語学者達の論争が浮かび上がってくる。彼らはこの問題に関与することが必要であると考え、彼らの位置にふさわしく対応しようとした。たとえば Baudouin de Courtenay は Brugmann-Leskien に対する批判で述べている：

> “上から見下している言語学の専門家達は大きな理想を上品ぶって無視することは誰の役にも立たないし、発展もないということを肝に銘ずべきである。一つの国際補助語という力強いイデーはもはや沈黙の中に埋もれさせられるべきではないし、無視されることもできない段階に達しているのである”(注16)

Schuchardt 自身は当時の補助語のどれか(Volapük とか Esperanto など) を具体的に身につけてはいなかった。 1907年の論文の中で彼は述べている。

> ....私は灰色の理論から抜け出すことは目指さなかった。私は提案された人工的共通語のどれ一つ学ばなかった。ただエスペラントとはある晩のことふと出会った。彼はエスペラントの教科書を手に取りぱらぱらとめくった。そしてそれだけで、一冊の本を本質的に理解することができた....(注17)

それは彼がロマンス語とゲルマン語から選ばれた語幹を既に知っていたことによっている。文法の規則性は彼が予想したよりもずっと容易に理解することを可能にした。

エスペラント語は語幹がロマンスとゲルマン語系語彙からみちびきだされており、音韻論、語尾変化等において、同じ特徴を持つている。これらの特徴がエスペラントが他の言語学者達から拒否される原因であった。

Schuchardt の人工語に対する肯定的な態度には別の重要な理由があった。すなわち当時の多くの言語学者が人工語に対して抱いた嫌悪感ないしは敵視への反発である。言語学者達の人工語にたいする敵視は当時の学界で大きな勢力を持っていた、言語有機体説からきている。Schuchardt は倦むことのない論陣を張って、言語は社会的な産物であるという立場から、この言語有機体説を鋭く批判した。

... この論文を書く切っ掛けを与えたのは Volapük である。もっと正確に言うと言語学界に明らかに存在する敵視である。..... 私は人工語に向けられた非難の多くをもっともだと思う。私はもっと大まかな簡単さと、内的な関連が目指されるべきだし、あるいはひょっとして今なお目指されているかもしれない... 言語研究者達がヴォラピュク一般に反対であること、同様の世界語に対して、いわば生理的な嫌悪感をもっているように見えることが私をしてこの問題にとりくませた原因である。... ある人の中には人工語に対する陰鬱な感情がある。また別の人々はヴォラピュクは人工的なまがい物であって、有機体として生成したものではないという命題によって視界がさえぎられている。(注13)

Schuchardt は、インド沿岸のポルトガル系クレオール語は母国のポルトガル語から徐々に、無意識のうちに発展したものではなくて、ポルトガル人が現地でヴォラピュキストのように彼らの母語を意識的に現地の土着の人々に取っつきやすいものにするために、人工的に広めたのである、ということを指摘する。

ja fazer (schon machen)
ja ver (shon sehen)
ja trazer (schon bringen)
fur fez, vin, trauxe

logo fazer (bald machen)
logo ver (bald sehen)
logo trazer (bald bringen)
fur fara, wera, trava(注19)

また Schuchardt は以下のように述べている：

...この変化は異なる条件下で様々な経過をたどる。たとえばロマンス諸語はそれぞれ異なる

過程を経てラテン語から生じたのである。....ヴォラピュク語はこのような自然言語の発展過程からは、ただより広い基盤と慎重に検討されたプランによってのみ異なっているのである。...

あたかもこの神話は決して死に絶えることがないかのように、人々は自分が担い手である活動を解き放ち、厳かな尊敬のためにそれを自己にとって対象化し、あるいは擬人化することを好む。一個の有機体としての言語という考えなしには、もはややってはゆけない。この言語観がホムンクルス(注20) としての人工的な言語という笑うべき姿を引き出す.....

人工的な言語は完全な自覚を持って考案された言語技術を意味する。即ち言語の理想である。またはこの技術は、むしろ無意識の働きによって完全化されるのだろうか。どの言語においても、その発展過程を一瞥してみると、そのことは確認されないように見える。我々が真の進歩を認めるところでは..... そこに個々人の自覚的な創造的な力が疑いもなく最も多く働いている。言語的な変化が発生する暗闇がより深いほど、その変化は美しい合目的性という性格は少なくなる。その変化は衰弱し、骨化し、こぶなどの冷血な観察者にとっては最高に刺激になるような様態を示す。そのような言語を日常用いなければならないものにとってはやっかいな重荷以外の何ものでもない...." (注21)

Schuchardt のこの発言は繰り返し味読されるべきである。なぜならここには彼の思想の核心が現れているからであると Ölberg は述べている。(注22)

もし言語が自然の有機体ではなく、人間のように生まれ、成長し、消えてゆくエネルゲイアであるなら、技術であり熟練であるなら、人間の活動に依存するところの、その活動にのみ依存するなら、補助語に対する偏見は存在しえないであろう。(注23)

具体例として Gustav Meyer と Brugmann との論争を Ölberg により省略して引用する：

"ヴォラピュクは二つの言語の抱擁で生み出されたものではない。その体中に自然の生き物のようには血は流れていない"

という Meyer に対して1894年 Schuchardt ははっきりと述べている。

"全ては言葉のあやである。詩人だけが、もし学者が文人であったなら、そのような美辞麗句を創り出す。..... 生命と成長という人が当然のこととして、言葉にも転用した二つの概念は慎重な取り扱いを要する。.... ここに 重大な誤りが惹き起されるおそれがある 。メタファーは全くのところ常に強い誤りの元なのである。自然言語と人工語というメタファーは今でも否定的な効果を持つ..... (注24) 。

Brugmann: 生命と成長、正当にも言語にも応用される二つの概念はヴォラピュークには不可能である。なぜならその体中には自然の生産物にのみ存在する血が流れていないからである。それは生命力の弱い早死にを運命づけられている産物である。それはホムンクルスである。

Schuchardt: この G. Meyer の大げさなおしゃべりは“言語は生きている（ないしは死んでいる）有機体である”という無意味な主張を想起させる。Brugmann のモットーの人間自身に対置されている、人を欺くことのない“母なる自然”と“人間的自然”は詩的な虚構である。それは真のまじめな学問には居場所を持たないものである。

Brugmann：重大なことは人工語は個々の創造者気取りの作り物であって、全体に有機的に適合するかという試験には耐えられないものである。

Schuchardt：... この響きのよい文を理解できない。ここで取り上げられている有機的ということをどのように考えるべきなのであろうか。全く同様に“死んだ言語”という言い方も単なる比喩である。まじめな学問は比喩や正確でない非論理的な比較でもって取り扱うことを用心しなければならない。どの言語もわれわれがそれをマスターするまでは死んでいる。我々がその言語を我々の頭脳に、ないしは我々の魂の中に導き入れるやいなやその言葉は生命を得るのである。... この誤解を招くような、また現実にはあわない生きた言語、死んだ言語という言い方を完全に学問の領域から排除することが最良の策であろう。(注25)

当時の著名な、深い学識を身につけた学者達の論争において、ここに人工語に対する賛成と反対を分ける決定的なポイントがおかれている。世紀の変わり目以来、あるいは De Saussure 以来、克服されたといわれているもの“有機体思想と言語の自然という本質”に対する態度である。しかし言語政策問題の中でこの考えは今なお存在しており、それを排斥する際の唯一の口実になっている。

5

“ヴォラピュークの提案によせて”という最初の論文の中で Schuchardt は述べている。

...言葉というものは単なる理解のための手段ではなくその民族のメルクマールでもある。このメルクマールは現在の時代にあってはいっそう強調されている、とりわけドイツ人によって。そして各民族語は今や可能な限り画然と相互に区別され、常に新たに”新しい領土でのより多くの支配を目指している。まさしく言語がのぞんだことを他の言語が破壊したのだ”(注26)

ここから彼にとって一つの中立的な世界語の必要性が生じる。

世界政治の発展と権力関係の変化は今世紀において、以前には想像できなかったような新しい局面を生み出した。言語と結びついたナショナリズムは一層強くなった。一つの自然言語による世界支配を意図的に設定することは不可能であろう。国連でもたった一つの国家語が公用語として用いられることは、現実的ではないであろう。この点に関して Schuchardt は正しい方策を予感していた。すなわち民族語の権利に影響を与えないような中立的な計画言語の必要性である。そしてある計画言語の使用に障害が除かれ、表現の確実性が成りたつとき、はじめて人工語による、深い複雑な考察の伝達が可能になるとする。
ところで最近のインターネットの普及にともなう世界規模における英語の使用は別の意味における、人工的に設定されたのではない、自然発生的な世界語の成立とでもいえるのではないだろうか。しかし Schuchardt の時代にはこの問題は全く無関係である。

Meyer は今世紀初頭に激しくなった民族主義とそれに伴う民族語の権利の主張に対して、極小の民族でさえ学術刊行物を自分たちの言語で出版しようとすると、非難した。

Schuchardt はこのような傲慢さに対して反論する。一つの普遍的な言語はどのような場合においても、民族間の対立の激しさを和らげるだろう。そして特にこの対立が民族の密接な接触によって際限なく高まるようなところでは、このような言語の導入は問題解決に望ましい手段となるだろう。彼はアメリカの北西部におけるオレゴン・ピジン語の良い効果を示唆している。それはインディアンと白人の間にホムンクルス的に発生したが、今や20以上もの言語の違う様々な小さな種族間の相互理解の手段になっており、さらに子供達にとっては母語になっているのである。

遅くともピジン語がクレオール語になった時点では、即ち母語として用いられる時点ではこの言語に対する理論的などのような非難も当てはまらくなる。それは血が通っていない、その背後には世界像がない、人間的な感情の起伏を表現することができない、等々といった非難である。もし人が保守的になり、人間はある一つの自然言語で自己を表現できる、しかし人工語ではできない、と主張する人がいるならば、現在では以下のことが示されうる。もう既に一つの計画言語を母語とするかなり多数の人間が存在するということである。Schuchardt の時代にはこの論拠を挙げることは不可能だった。

計画言語ないしは言語政策の問題は現代においても極めてアクチュアルな問題である。ただ二つの世界大戦を挟んで100年前と現代の世界政治とその権力構造は大きく変わった。しかしそれに伴う言語問題への考え方において、Schuchardt は彼の時代の誰よりも先んじていたといえる。また言語を社会における人間活動の産物であり、社会的な機能であると、捉えたことに

おいて Hugo Schuchardt はいわば最初の社会言語学者であったといえるだろう。

文　献

1. Bondzio, W.(Hg.), (1980): Einführung in die Grundfragen der Sprachwissenschaft. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
2. Gerhardt, D.(Hg), (1971): Slawo-deutsches und Slawo-italienisches von H. Schuchardt. Munchen: W. Fink Verlag.
3. Hartig, M. (1998): Soziolinguistik des Deutschen. 2. Aufl. Berlin: Weidler Buchverlag.
4. Helbig, G. (1970): Geschichte der neueren Sprachwisenschaft. Unter dem besonderen Aspekt der Grammatik-Theorie. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
5. Helbig, G.(1986): Entwicklung der Sprachwissenschaft seit 1970. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
6. Hugo Schuchardt-Brevier. Ein Vademecum der allgemeinen Sprachwissenschaft. (1976) hersg. v. Spitzer. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (Unveränderter reprografischer Nachdruck der 2. Aufl, Halle(Saale) 1923) [Brevier]
7. Hugo Schuchardt - Schuchardt-Symposium 1977 in Graz - . Sitzungsberichte 373. Bd. der österreichischen Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-historische Klasse. (1980) Wien. [Sitzungsberichte]
8. Ölberg, H. W.(1980): Die Weltsprachenfrage im wissenschaftlichen Werk H. Schuchardts. In: Sitzungsberichte. S. 173-188. [Ölberg]
9. Schuchardt, H. (1885): Ueber die Lautgesetze. Gegen die Junggrammatiker. Berlin: Verlag v. R. Oppenheim.
10. Schuchardt, H. (1888): Auf Anlass des Volapüks. Berlin: Robert Oppenheim. [Volapuk]
11. Schuchardt, H. (1914): Die Sprache der Saramakkaneger in Surinam. Amsterdam: J. Müller.
12. Schuchardt, H.(1988): Slavo-deutsches, Slavo-italenisches.
13. Wandruszka, M.: H. Schuchardt und die "Linguistik 2000". In: Sitzungsberichte. S. 293-314. [Wandruszka]
14. ミルカ・イヴィッチ、早田輝洋、井上史雄訳(1986)：言語学の流れ. みすず書房.
15. ゲアハルト・ヘルビッヒ、岩崎英二郎他訳(1973)：近代言語学史. 白水社.

注

1 Wandruszka S. 300.

2 文献 14, S. 43.

3 Ölberg S. 174.

4 文献 7

5 文献 6

6 Ölberg S. 175.

7 大修館『言語』1982年10月号89-90頁

8 Ölberg S. 174.

9 Wandruszka S. 293.

10 Wandruszka S. 294.

11 Wandruszka S. 295.

12 文献 2

13 Volapük S. 26.

14 Ölberg S. 176.

15 Volapük ドイツ、バーデンの神学者 M. Schleyer が1880年に発表した国際人工語。
文献 1. vola<world, pük<speak. この語は中辞典以上の英和や独和には載っている。

16 Ölberg S. 178.

17 Ölberg S. 178-9.

18 Volapük S. 3.

19 Volapük S. 8.

20 Homunkuls こびとの人造人間。

21 Ölberg S. 180.

22 Ölberg S. 180.

23 Ölberg S. 180.

24 Ölberg S. 181.

25 Ölberg S. 182.

26 Volapük S. 30.